

## 第6回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成28年11月25日(金)  
14時55分～17時00分  
旧文部省庁舎2階 文化庁 特別会議室

### 〔出席者〕

(委員) 沖森主査, 森山副主査, 秋山, 入部, 川瀬, 塩田, 鈴木, 関根, 田中, 納屋, 山田, 山元各委員 (計12名)  
(文部科学省・文化庁) 岸本国語課長, 鈴木国語調査官, 武田国語調査官, 小沢専門職ほか関係官

### 〔配布資料〕

- 1 第5回国語分科会国語課題小委員会・議事録(案)
- 2 森山委員御発表資料
- 3 平成28年度「国語に関する世論調査」について(委員限り)

### 〔参考資料〕

- 1 子供, 子ども, こども(関根委員提供)
- 2 国語課題小委員会におけるヒアリング及び意見交換の内容について
- 3 国語課題小委員会における審議スケジュール(案)

### 〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について(報告)

### 〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録(案)が確認された。
- 3 森山副主査から配布資料2「森山委員御発表資料」について説明があり, 説明に対する質疑応答が行われた。
- 4 森山副主査の説明を踏まえ, 意見交換が行われた。
- 5 事務局から配布資料3「平成28年度「国語に関する世論調査」について」説明があり, 説明に対する質疑応答, 及び意見交換が行われた。なお, これ以降の審議は非公開での実施とした。
- 6 第7回国語課題小委員会について, 平成28年12月8日(木), 午後3時から5時まで旧文部省庁舎・文部科学省第2会議室会議室で開催することが確認された。  
(後日, 12月8日の小委員会は開催しないこととされた。)
- 7 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等(配布資料3に関わるものは除く)は次のとおりである。

### ○沖森主査

前は, 山元委員と関根委員に御発表をお願いしました。

山元委員からは, 参考資料2の2ページ及び7ページにあるような, コミュニケーション能力とは, 「言語を介した他者との共同活動の中で, 何かを共有・確認していったり, 新しい考えを生み出したりする行為ができる能力」と定義付けられるのではないか。また, 言語コミュニケーション能力は, 属している共同体の持つ社会的振る舞いや

社会文化の内化したものとして蓄えられるものであり、その共同体をより望ましいものへと更新していこうとする資質として、育てていくものである、といったような御発表でありました。

関根委員からは、同じく参考資料2の4ページにあるように、不特定多数の人々への表現においては、そのまま用いると相手にとって難しい言葉、戸惑いを与えそうな言葉、傷つけそうな言葉を別の言葉に言い換えている。また、表現において、分かりやすくあること、正確であること、気遣いがあることというのは、それぞれが抑制し合いながら、バランスを取っていく関係なのではないか、といった御発表でした。

そこで、本日はまず、前回に意見発表をいただいた関根委員から、参考資料1を用いて、補足する点について御説明していただきます。よろしく申し上げます。

## ○関根委員

前回の私の発表の際に、森山副主査から、「コドモ」や「ショウガイ」の表記について、新聞はどうしているかという御質問を頂きました。議事録を見直しまして、私の答えがどうも不十分で言葉足らずだと思ったものですから、お時間を頂いて若干補足させていただきます。

参考資料1を御覧ください。「コドモ」は、御承知のとおり、全て漢字の「子供」、「ども」を平仮名にする「子ども」、全て平仮名の「こども」という3通りの表記が行われています。国語施策も併せて簡単に経緯を記しておきましたが、国語施策の方で誤りがあれば、御指摘ください。

前回、同じ意味で異なる表記が存在する異表記については、統一しておかないと、読み進む上で、そこで引っ掛かってしまうと読解や理解の妨げになる、余分なところで情報を処理する容量を消費しないように、新聞では表記の統一をしていると申し上げました。ところが、「コドモ」に関しては、読売新聞をはじめ、統一していないところも少なくありません。

国語施策では、かなり揺れていた時期があったのですが、現在では、常用漢字表の語例欄に全部漢字の「子供」という表記が載っていて、これに基づけばいいということになるのですが、読売新聞での使用例を調べましたところ、下のグラフのようになりました。

4,000 辺りから始まっているのが、全部漢字の「子供」です。500~1,000 の辺りから始まっているのが、交ぜ書きの「子ども」です。用語集に項目がなかった時代もあるのですが、紙面での出現頻度を見ると、圧倒的に、当初は全部漢字の「子供」が多く、じわじわと交ぜ書きが増えてきて、2009 年辺りのところで逆転しているということがお分かりになると思います。これは、一般に交ぜ書きが増えていて、例えば、「子どもの権利条約」であるとか、施設の名前であるとか、イベントの名称などで、よく交ぜ書きの方が使われているという状況を反映しているのだと思います。

その背景には、御存じの方も多いたと思いますが、子供の「供」についてのある見方があります。子供の「供」は、主人などに付き従うこと、従う人の意味で、子供の人権を無視しているのではないか、だから「供」は平仮名で書くべきだという考え方です。実際、紙面でも全部漢字の表記をすると、そういう抗議が来ることもあります。

全部漢字の「子供」の表記が本当にそういう意識に基づくものなのか、そういう語源なのかはよく分からないのですが、仮にそうだとした場合、今、子供の「供」という字を見て、そういうニュアンスを感じる人がどれだけいるか。あるいは、「供」は複数を表わす接尾語の「ども」から来ているとすれば、そもそも「ども」自体が見下す意味を含んでいるわけで、そうすると、この「供」の漢字の字義よりも、こっちの方が問題ではないかと思ってしまう。

そういうところから、一概に全部漢字の「子供」表記を排除したくはないのですが、

ただ、それを好ましくないという読者は、その表記を目にしただけで、読む前から記事そのものへの拒否感を覚えるかもしれない。表記への反発だけで読んでもらえないのは困ります。それから、平仮名の表記の「ども」も、ソフトで優しい感じがするという利点はあるように思いますし、全部漢字だと堅苦しいというイメージもあります。

一方で、漢字で書くべきだという主張は、漢字仮名のいわゆる交ぜ書き許すまじという考え方から唱える人もいます。交ぜ書きと言っても、訓読みの熟語ではそういうのはどうなんだろうか、目くじらを立てなくてもいいのではないかと思います。こっちにも余りくみしたくない。では、もういっそ全部平仮名という手もありますが、せっかく漢字の表記があるものを使わないのは、これもまたいかがなものかと。そういった事情から、読売新聞では、3通りの表記を用語集に載せています。

下の部分に、各社で用語集を出しているのので、そこから取ったものを掲載しています。いろいろですが、全部漢字というものを中心に書くというところもあれば、読売新聞のように、三つの表記を載せて、文章の内容に応じて柔軟に使い分けるといったところも多いようです。ただ、実態としては、交ぜ書きの「子ども」が多くなっているのは、先ほど申し上げたとおりです。

これがその状況ですが、付け加えれば、前回、表記・表現を選ぶ際には、人を不愉快にさせないとか、傷つけないとかという観点が必要とも言いましたけれども、全部漢字の「子供」というのがそれに該当するのかどうか、もし多くの人がそう感じているなら、それをやめて違う表記にする意味はあるかもしれません。一方で、仮に字義や語源がそうであっても、果たしてそこまで遡ることがどこまで意味を持つのかということもある。あるいは、表記・表現に差別的な意味合いがあって、それが実態を映し出しているとしたら、では、その表記を変えることが、かえってその実態を覆い隠したり、あるいは、

実態が改善されたという欺瞞<sup>まん</sup>を作り出したりする、そういうことにもなりかねないのではないか。こういうことは「子供」表記だけではなくて、恐らく今皆さんの頭には別の言葉も浮かんでいると思いますが、ほかの様々な表記・表現についても当てはまることだと思います。

望ましい表記・表現といったことに手を着けていくとしたら、具体的な語について、それを提示することは、やはりかなり難しいと思いました。多分、網羅はできないし、「子供」のように、いろんな観点が出てきて、決めかねるというものも多いはずで、言葉を用いる際には、そういう様々な観点を配慮して選択する必要があるということと言えます。具体的にこれだと示すことができなくても、問題点の在りかとか、そういう意識を持つことが大切であるといったことなどを説いていく格好もあるかと思っています。

#### ○沖森主査

ありがとうございました。

ただ今の補足説明について、質問あるいは御感想があればお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。特にございませんでしょうか。（→挙手なし。）

では続きまして、森山副主査に御発表をお願いします。御発表の後に、質疑と意見交換を行いたいと思います。森山副主査は日本語学を専門とされておりますけれども、本日は、表現と解釈の問題を具体的にお示しになりながら、配布資料2を用いてコミュニケーションの在り方についてのお考えをお話いただく予定です。お忙しい中、御準備くださり、ありがとうございます。では、よろしくをお願いします。

#### ○森山副主査

「日本語のコミュニケーション」というタイトルで、日本語を使う人々のお役に立つ

にはどういうことが必要かということで、整理をしてまいりました。

日本語というのは様々な特徴がありますが、一番は、漢字、平仮名、符号などの表記体系が恐らく世界でも一番複雑で、勉強しにくい言語と言えるかと思います。それから、言葉という点でも、和語、漢語、外来語など、非常に豊かな言葉がありますので、これもなかなか難しい使い分けがあります。あと、敬語。敬語の中には、語彙、文法、運用といった様々な問題があつて、これも非常に難しい問題です。また、日本語を文法的に考えると、主語がなくてもいいとか、助詞が隠れる場合があるとか、非常に難しい問題があつて、誤解が比較的起こりやすいということもあるかと思います。さらに、語順の自由度も高く、これもなかなか難しい問題です。音声的にも、開音節構造と言いますが、例えば、「オハシ」と「オオハシ」さんは、英語の話者にはその区別が非常に難しいですが、日本語にとっては当たり前のような使い分けです。そういう音節上の難しさもあります。また、方言が非常に豊かですので、「ゆれ」や「バリエーション」も豊かです。それから、いわゆる察しの文化と言われるような、運用における対人的な気配りというのも日本語は非常に豊かです。豊かということは、逆に言うと複雑さでもあつて、難しさを言語として抱えていると思います。

最初に、コミュニケーションにおける対人関係から少しお話をさせていただいて、提案をさせていただければと思います。

人間関係が様々なコミュニケーションに関わりますが、そのことを見る例として、例えば、明後日クラブの活動があるんだけど、忙しくない時期で行ってもいいと思えるコンサートがあり、それに行きませんかと言われた場合に、相手が答えた。「行けたら行く」、「行くと思うけど分からない」、「分からないけれど行くと思う」、それぞれ何%ぐらい期待しますかというのを聞いてみました。委員の皆さんでしたら、いかがでしょうか。まず、「行けたら行く」は、やはり非常に幅があります。5%程度の確率だという人と、70%ぐらいで解釈する人とがあります。平均値を取りますと、31.84%でしたので、ほぼまあ行かないだろうと解釈されているかと思います。続きまして、「分からないけど行くと思う」というのは、これはやはり「行くと思う」が後ろに出てくるのですが、7割ぐらいが行くという、そのような分布でありました。少し違うのが、「行くと思うけど分からない」。同じことを言っているのですが、順番が違うだけで、行くという確率は結構減りまして、44.79%となっております。

このように、同じ言葉ですが、順番がどうかとか、あるいは、その背景がどうかということで、解釈が非常に難しい問題である。また、今回は親しい友人としましたが、先生の場合だったらどうかとか、あるいは、親しくない友達の場合だったらどうかということもあります。その辺りは省略いたしますが、例えば、「行けたら行く」というのは、事実上は断りである。しかし、解釈は幅があつたりしました。そういう問題。あるいは、ものの言い方でも、どちらを先に言うかによって随分受け取り方が違う。そういったことを大切にしていく必要があると言えるかと思います。

人と人の関係は様々ですが、友好的な関係を築きたいと思っているけれども、時として様々な誤解が起こる場合というのが出てきます。

小学校の場合でも面白い問題がありまして、読み聞かせの場に誘われたけれども、行くのは嫌だと思ったときに、どう言いますか、何と言って断りますかというのを調べてみたことがあります。親しい人と親しくない人で、断り方のパターンを、小学生、中学生、大学生で比べました。大学生で多いのは、「その日は都合が悪い」と。本当は都合が悪いことはない、と聞いているのですが、大体ホワイト・ライと言われるようなそをつくわけです。特に、親しい人には、ストレートに「行きたくないよ」と言うのに対して、親しくない人には、割とうそをついて気配りをします。

ところが、小学校の子供たちは反対で、親しい人に断るときには、「考えておく」と言います。親しくない人には、「行きたくない」というのが結構多いです。つまり、小

学校の子供たちは、親しくない人はもう人間じゃない、でも、親しい人には気を使うというのがあります。だからこそ、いじめというのは深刻なのかと思いました。仲間の中でそういう気配りもするわけですが、一旦、その仲間から離れてしまうと、非常に寂しくなってしまうということ。大人の場合は、そんなことはなく、親しくない場合の方がしっかり気遣いをします。コミュニケーションと言いますが、その下にある人間関係には非常に様々な要因があります。

そういう点で提案です。私たちの取り組む一つの仕事として、この後いろいろありますが、「コミュニケーションでの失敗」を整理するのはいいのではないかなと思います。様々な失敗がありますが、先ほどの「行けたら行く」というのが、これは多分来てくれるんだと解釈したのに来なかったからがつくりしてきたとか、あるいは、「考えておきます」というのが、事実上断りなのか、あるいは、本当に考えてくれるのかとか、そういう経験はいろいろあります。

あるいは、異文化間コミュニケーションという観点もあるのですが、こういう証言を聞いたことがあります。「留学したいと思います」というメールに対して、「よく考えてください」と書いた。よく考えて、「やっぱりお願いしたい」と言ったら、先生は「またよく考えてみてください」。「どうしても行きたいと思っています」と言ったら、「もう一度考え直してください」と言われた。要するに、最初から断っているのですが、ストレートに駄目だと言わない。こういう「察しの文化」が日本にはありますが、それが、特に文化が違う皆さんの場合には通じないことがあります。

あるいは、言葉そのものの持っている多義性というのもあります。「灰皿を換えてもよろしいでしょうか」と言われて、「結構です」と言ったら、どちらでしょうか。オーケーか、ノーサンキューか。これはどちらも論理的には成り立っています。

あるいは、ユニバーサルな言葉遣いとして、語順なども関係がありますが、例えば、「遠足のとき、AさんはBくんを大きな声で呼びました。」と「運動会のとき、AさんはBくんが大きな声で呼びましたが、聞こえないようでした。」、語順が少し変わっています。例えば、小学校の子供たちは「誰が呼びましたか」と聞くと、やはり答えが違います。普通語順は、ほぼ100%近くが答えられるのですが、語順を置き換えると、7割ぐらいに下がります。つまり、「呼んだのは誰ですか」というような表現ですが、表現の工夫を変えるだけで分かりやすくなったり分かりにくくなったりします。ユニバーサルな言葉遣いとして、みんなが分かりやすいような言葉って何なんだろうということも考えることが必要です。

そういう点で、日本語の特徴と関連して、先ほどの問題ですが「みんなが大好きアンパンマン」という歌があります。誰のことを誰が好きというのについて、解釈が二通りあります。一つは、「みんながアンパンマンが好き」という人気者解釈です。もう一つは「アンパンマンは博愛主義者」、みんなのことが好きだという解釈です。聞きますと、圧倒的に人気者解釈が多かったのですが、意味としては、博愛主義者的解釈も成り立ちます。このように、「みんなが大好きアンパンマン」という歌でも、実は、誰が誰のことを好きか分かりにくい。こうした日本語の構造的な問題が生じております。日本語は主語を言わないことがある、助詞が消えることがある、というようなことです。そういった失敗をいかに防いでいくのかという問題です。

同じようなことは、「けがをした花子さんのお父さん」ということにも言えます。誰がけがをしたのか分かりません。

私自身の失敗ですが、久世保育園に関わっていたときに、お葬式の際「保護者会・OB会」と書いたのですが、この「・」が見えなかったようです。保護者会で出したお花が、「保護者会OB会」の出したお花になってしまいました。保護者会と保護者会OB会の二つの連名で出したお花だったのですが、それがOB会だけになってしまったという失敗です。どうしたらよかったですでしょうか。「同」を付けたら二つに分かれます。

こういう失敗などを直していく、防いでいくというのはあるかと思います。

方言差による失敗もあります。例えば、「ニシハマ」と言うと、沖縄では「ニシ」が北の方ですから、西の方に行ったら駄目であるとか、あるいは、「これ、ほかしといて」と言ったら、これは関西方言で言っていますが、「保管する」と間違えられますが、東北方言で「投げる」と言います。「けないで」は、これは国立国語研究所の竹田晃子氏に教えていただいた例なのですが、東日本大震災のときに、お医者さんたちが行ったときに、「けないで」と地域の方がおっしゃっていた。「来ないでくれ」という意味だと思って行かなかったら、おかしいことになっている。そういう意味ではなかったのです。「けな」というのは、「かいな」、つまり、腕のことです。「いで」は、「痛い」です。だから、「腕が痛い」とおっしゃっていたのに、「来ないで」と解釈してしまったという例です。こういう方言の差というのも大きな問題です。

それから、言いたいことをよりの確に伝えられるかどうかという問題もあります。「学生時代にアルバイトをするとたとえ少しでも経済的に自立できることになる。社会体験という点で勉強にもなる」。この後に接続詞を入れていただきたいのですが、後に「アルバイトをやりすぎると時間がなくなり、注意しないと、かえって勉強がおろそかになることもある」と続きます。どんな接続詞を入れますでしょうか。多いのは、「しかし」ではないでしょうか。ところが、「しかし」以外の接続詞も入ることがあります。まず、「しかし」というのは予想と違う方向に行きますので、先ほどの話ですと、アルバイトをするといいけれど、しかし、おろそかになる。アルバイトは余りやらない方がいいという方向になってしまいます。それに対して、ここで「ただし」を入れますと、少し意味が違います。大筋の方向は変わりません。勉強にもなるからアルバイトはいい。ただし、おろそかになることがあるというのは注意事項になります。こういった違いで、例えば、書いた人が、「しかし」を使おうか、「ただし」を使おうか、どちらを使おうかと迷ってくれたら、それだけでやはり意味が分かりやすくなります。「ただし」は、こういうふうな形式で大まかな流れは一貫している。部分的な注意や例外を述べるような表現です。こういった接続詞を的確に使うといったことも含めて、分かりやすい説明というのが大切かと思います。

ちなみに、小学校の作文で「ただし」は、ほとんど出てこないです。4年生でやっと少し出てくる程度です。「けれど」などは、1年生からたくさん出てきています。

それから、敬語の問題もあります。敬語も現在、更に複雑になっておりまして、「敬語の指針」という答申が出ましたが、少し課題があるのかと思う部分は、丁寧語が非常に複雑になっています。例えば、「……してください」というのはどういう敬語かというのは、定説的にはないのではないのでしょうか。「敬語の指針」では、特に書かれていなかったと思います。少なくとも丁寧語には入っていないのです。でも、我々は丁寧語的な感じで理解するのですが、「ください」に対して、「くださいませ」というのもあります。「くださいませ」の「ませ」は、これこそは丁寧語ですが、丁寧語が上級の丁寧体というのを持っているようになっております。

一方、普通体も2種類できておりまして、例えば、命令表現を考えますと、「……して」というのと、「……しろ」というのがあります。今までは命令形というのと、「しろ」でした。しかし、実際我々は「こっち来い」とか「用意しろ」とか普通は言いません。「用意して」と言います。そういう点で、普通体も少し分化しているわけです。また、「……でしょう」というのも、元は丁寧形ですが、現在は丁寧な意味は余りないのではないのでしょうか。これは方言差にもよるのですが、学生が関東に出てきて、先輩に「……でしょう」と言ったら、「おまえ、失礼だ」と言われたという経験があると聞きました。例えば、自分の子供に対してでも、「駄目でしょう」というように使うわけです。そういう丁寧体・普通体ということ自体も非常に分化していて、謙譲語とか尊敬語という以外に、対面のコミュニケーションの様々な場面で敬語が変化してきておりますが、

そういったことへの対応も必要かと思う次第です。

そういったことを通して、みんなが「伝え合い」に対して意識的になる。先ほどの関根委員のお話にあったように、意識的になるということがとても大事です。こうでないといけないということ言うのではなくて、みんなが寛容になると同時に、それなりに配慮ができるといいと思います。一つは、言葉のユニバーサルデザインです。日本語が得意でない子供たち、あるいは、海外から来た皆さんも分かりやすいようにするにはどうしたらいいか。それから、時代の変化に応じた交通整理、そういったことが必要かと思えます。

参考までに、これは全国学力・学習状況調査の問題です。子供たちの文章力には非常に課題があります。例えばこの文ですが、「放送委員会の役員を決める話し合いをした。ぼくは委員長を任されることになった。新しく委員になった五年生は、放送機器の使い方が分からなくて不安そうにしていたので、ぼくは、これまでの経験を生かして、いろいろなことを教えてあげたいと思った」。これだけの文ですが、これを、「だから」を用いて最後の文を二つに分けてくださいという問題です。7割以上できると思っていました。答えは、「新しく委員になった五年生は、使い方が分からなくて不安そうにしていた。だから、教えてあげたいと思った」という非常に単純な問題です。ところが、これをできたのが15%でした。だから、子供たちの文章力に非常に課題があると言えます。この子供たちが大きくなったのが大人たちで、大人の皆さんも、文章で何かを伝えるために書くという力をしっかり付けていく必要があるのかと思えます。同じ問題が4年後に出たのですが、そこでも23.6%の正答率でした。

以上のように、言葉の失敗とその対策について整理する。例えば、国交省は交通事故を減らす、厚労省は病気を治す、経産省は消費者を保護するとか、そういうものとして、文化庁は、言語コミュニケーションに関わる事故を減らすというのがあっていいと思います。表現の問題や、コミュニケーションに関わる対人関係とか、様々なものを含んだコミュニケーションの問題があります。これがまずは第一です。

もう一つ提案させていただきます。表記記号の用法の整理が手付かずではないかと思うところがあります。いわば言葉をユニバーサルデザイン化するに当たってのプラットフォームの整理という観点です。

例えば、「夏も近づく八十八夜」という歌ですが、意味が二つあるところがあります。「あれに見えるは茶摘みぢやないか」の部分なんです。「茶摘みぢやないか」に意味が二つあります。「あれ、もしかして茶摘みぢやないか？」というのと「あれ、茶摘みぢやないか！」、関東風に言うと、「茶摘みじゃねえか！」というのと「茶摘みじゃね？」という違いです。関西風に言うと、「茶摘みぢやうか？」というのと「茶摘みやん！」の違いです。「茶摘みだ」と解釈される方が多いでしょうか。これは、意味は二つあるのですが、もしここに「？」を付けたら、「茶摘みぢやないか？」だったら、分からない、という意味ですし、「茶摘みぢやないか！」だったら、茶摘みだよ、という意味での「茶摘みじゃねえか」「茶摘みじゃん」といった意味になります。この「！」や「？」は、今、公には使われていないということですが、使ってもいいのかと思えます。

同じようなことをやってみました。「運動場であそんでいるじゃない」という文に対して、どこにいますかと尋ねたら、「運動場であそんでいるじゃない」ということは、運動場にいるわけですが、それが分からなかった子供が3年生で非常に多く、分かったのは3分の1でしかなかった。6年生でも6割しか分からなかったということで、イントネーションなどがないと子供たちは分かりにくいということがあります。そういう点で、「！」や「？」の記号は、もっと使ってもいいかと思えます。これは、そういう有意差があるということです。

実は教科書にも問題がありまして、教科書には「？」は使えないのです。確か役所では、「？」は使われないのですね。この教科書に引かれた文章のどこかに「？」が、原

作ではありました。「マサエは、ふと思い出して、台所のお母さんをよびました。「お母さん、わたしのスキーぐつ、かわいてる。あした、学校でスキーの日だよ。」お母さんが、水音を立てながら答えました。「おや、あしただったの」。これは、この部分です。「わたしのスキーぐつ、かわいてる」、このように答えますと、乾いていることを報告していることになるので、意味が通じません。原作は、ここに「？」がありました。だから、小学校の教室へ行って、子供たちがここをどう読むかによって、どの程度分かっているかが分かります。分かっている子はちゃんと「わたしのスキーぐつ、かわいてる(?)」と読んでくれますが、例えば、ここに「？」があると大分分かりやすくなります。ところが、これが教科書では使えないのです。というような問題があるので、これは何とかした方がいいのではないかと思うわけです。

使い方が曖昧ということもあります。例えば、「—」、「～」、「…」、「:」等の使い方です。例えば、「京都・宇治の名所」と言われたとき、京都市と宇治市というのは違う市なので、京都の名所と宇治の名所という解釈も十分成り立ちます。一方、京都の中の宇治というところもあります。京都府の中の宇治ですから、どこよというのがあるわけです。

それから、「・」と「,」のどちらのレベルが上なのかという問題もあります。例えば、点で申しますと、「二・二六事件」とか、あるいは、「二, 二六度」とかいうときに、様々な表記が混在しております。それから、「区切り符号の使い方」という、これは政府の文書です。この中には、「明日、東京を立て、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見て来ます。」という文で、恐らく、大阪・京都・神戸は一まとまりだろうと思いますが、こういう区切り符号の使い方も、人によって少し曖昧かと思えます。

長音符号、ポーズの符号も、人によって違います。「ふうん」と言うときです。ちょっと関連しまして、「私、帰ります。」というときに、ポーズが最も長いのはどれか、それから、一般的にどのポーズを使うか、それから、悲しい・うれしいといった違いはあるかということも調べました。「私、帰ります。」というのを、「,」で言う場合、一旦「。」で区切る場合、「…」の場合、「—」の場合で比べてみますと、ポーズが最も長いのは分かれました。「私……帰ります。」と「私——帰ります。」。一般的にはどちらを使いますかというところ、「…」が多かったです。悲しいのは「…」が多かったです。うれしいのは「,」が多かったです。

漫画などでは、様々な使い分けがあります。「……」におけるポーズとか、延ばす音の様々なバリエーションとか、そういったところも、これはいけないとか、これが正しいとかいうのではなくて、様々な表現で工夫されているのは、やはりうまく使ってもいいのかと思えます。

例えば、韓国は、「——」は無音のときには使わないそうです。大体解説のときに使うと聞きました。例えば、こういう『人生論ノート』で、解説で使うような「——」とか、夏目漱石の『こころ』では、「——」がポーズとして使われています。少し整理してもいいのかと思えます。小津安二郎は、ポーズという部分に「——」と「…」の両方を使っています。赤川次郎さんもそうです。「いや、そうじゃなくて……」「そのリストは——」といった使い分けがいろいろあります。

以上のように、表記上の符号、使い方はいろいろあっていいのですが、どういう意識で使われているかということ、少し整理してもいいのかと思えます。特に最近、「打ち言葉」と言われるような様々なメディアでの言葉もありますので、そこでの使い方といった多様性も守りつつ、無用な混乱をなるべく防げるように整備するのいいかと思えます。

コミュニケーションは色々ありますが、「豊かなコミュニケーション」をする、的確に伝える、効果的に伝える、気持ちを大事にしながらいろんなものを作っていく、そう



いうときに、我々で必要なことは「共通モードの整備」，あるいは，こういう点で事故が起こりやすいというようなことの整理，そういったことがあるといいのかと思います。ありがとうございました。

○沖森主査

ありがとうございました。それでは、ただ今の森山副主査による御発表について、質問をお受けします。よろしくお願ひします。

○関根委員

「だから」を用いて書き換える問いで、正解率が低かったということで、どんな誤答があったのですか。それとも、無回答ということですか。

○森山副主査

無回答もあります。それと、「ぼくは」というのは主語ですね。主語を補う問題の正答率も中学校ではすごく低かったのですが、これは多分それはいいですね。

例年、例えば「ごんは、ひとりぼっちの子ぎつねで、森の中に穴をほっと住んでいました。」といった文を二つに分けましょうというとき、極めて正答率が低いです。50%です。ほかのものは大体70%ぐらいで、普通はそれを目指しているのですが、それもやはり書き換えの問題です。「……です。そして、……です。」という、そういう文を分けて書くというのは、大体例年非常に低いです。

恐らく、ちゃんと書いていなかったというのは、そのまま書いてしまっているか、問題をちゃんと理解していないか、あるいは、「だから」というのをちゃんと使えていないなどかと。

○関根委員

文を切らないで、「ので、」の後に「だから」と付けたりするようなものか。

○森山副主査

そういったものはあったかと思ひます。詳しくは、また持っ来てまいります。

○田中委員

二つの御提言をなさいましたが、後半の表記記号でのプラットフォームの整理といったところを、例えば、教科書レベルにするとか、あるいは、この範囲の中の記号について検討するとか、どういふお考かもう少し詳しく伺いたいと思ひます。

○森山副主査

まず、「？」が現在教科書で使えないというのは、やはり問題があるかなと思ひますので、「？」とか「！」等は、使えるようになっていいのかと思ひます。

それから、「：」の使い方が、「……については……です」のような箇条書きで使ったりしますが、そういう「：」の使い方も、こういう使い方があつた、ああいう使い方があつた。また「；」は、英語などではよく使いますが、日本語では余り使ひませんので、それも人によつて使い方が揺れるようでは少し困るかと思ひます。

あと、「…」も、確か中国などは、「…」ではなくて、ピリオドを「. . .」とつなげるような、そういう「…」もありまして、「…」の使い方も、自由にすればいいと言えはいいのですが、効果的に使うために、人々はどんなふうに使っているのか、以前、塩田委員のお話のとき、相場というお話があつたが、その辺りの相場、みんな大体こんなふうにして使っているといったことが分かるかと思ひます。例えば、沈

黙のサインで言いますと、「——」よりも「……」の方が多そうですね。これも、こうでないといけないということではないのですが、そういう、こんな使い方、あんな使い方をしている人がいますよ、こっちの方が一般的ですよという程度があっているのかと思います。

あとは、「・」です。先ほどの「京都・宇治」のような。そういうのはいろいろ検討したらいいのかなと思います。

#### ○田中委員

なぜ伺ったのかというと、「ワンピース」の例をお挙げになっていますが、漫画のようなメディアと教科書とは違うと思います。それから、どの媒体を使っているのかもやはり違うと思います。

というのは、今、実態がどうなのかとおっしゃいましたが、SNSが一般化してくる中で、例えばこんな実験的な調査をしました。大学生辺りの若年層たちが、実際に、程度の違う感覚形容詞、「まあ辛い」とか、「すごい辛い」といったことをどう発音し、どうやって打つのかといった調査をしました。大体のざっくりルールみたいなのはありますが、それも実に多様です。例えば、記号の数がレベルが上がると増えるとか、顔文字が出てくるとかといったような大枠のルールはありますが、かなりいろいろなことをやっている。そこまで踏み込むと、やはり漫画のような創作物の豊かさみたいなことは失われるから、その範囲をどうするか。

#### ○森山副主査

おっしゃるとおりです。正に漫画みたいなものは、これを統一しないといけないというつもりで出したのではありません。非常に豊かに多様で、「！」も漫画によって、せいぜい二つまでしか使わない漫画と、五つぐらい使う漫画もあります。あるいは、「あいうえお」に点を打ったりとか、それなどは非常に自由なので、そういう可能性も置いておきたいという意味で漫画を出した次第です。今おっしゃってくださったようなふだんの使い方は、非常に自由な創意工夫があっていると思います。ただ一方で、公式的に書く場合に、それでも少し整理がなされていない部分があるのかと。

以前、ブルガリア語の話者に話を聞いていたのですが、ピリオドとコンマは、文法的に教育を受けた人であれば、大体打つところが分かります。ところが、日本は一応自由であるとなっていますので、人によって本当に違いがあります。違いを大事にしようというのが漫画の例ですので、いろいろなメディアで大事にしたいということと同時に、公で書くときの一定の指針を少し考えてもいいのかなという程度です。

#### ○田中委員

創作的なものは考えないということですね。

例えば、作家の文体などの特徴で、句読点をどこに打つのかといったことが個性になっていて、見えないけれどもスタイルになっているといった研究はたくさんあるので、創作物は考えないということではよろしいでしょうか。

#### ○森山副主査

もちろん、そうです。谷崎潤一郎は日本語が下手だなんて、我々が言うことではないと思います。「，」「。」の使い方も、例えば、夏目漱石も「，」「。」はものすごく気を付けて打っていますので、そういったものは、これからの様々なメディアも含めて、もっと自由に、いろいろなものを使っていたらいいのではないかと思います。

#### ○田中委員

なぜくどく伺ったのかというと、実態調査が必要だと最後のところでおっしゃっていたことに関連して、創作物も含めて、ほかにも新聞、教科書など、本来、原作にあったもののどこが削られていて、それがどのように補填されているのかといったような、ちょっとタイプの違う調査とかをしたら有効かと思いつつ伺っていたものですから。

○森山副主査

特に、調査として、書くときの調査をやったらいいのかなと思います。「・」を使うのか、「（てん）」を使うのか。普通の人には、書くときに、あるいは、打つときに、どちらを使いますかといった質問。創作者が創作するのは自由だと思うのですが、一般の人たちが書くときに、自分はこのつもりでなかったのに誤解した、といったような調査です。

○田中委員

一応国語科の教科書では、記号の使い方と記号の意味という単元があるので、各社でちょっと違うところもありますが、そのことも含めて、調査をしてみるということは、すごくいいお考えだなと思って伺いました。

○関根委員

公用文の区切り符号の使い方と、それから、特に新聞を中心としたので、一番違って気になるのが、かぎ括弧の中で文が終始するときに、「。」を括弧の中に付けるか、付けないか、どちらですか。

○森山副主査

出版社によっても違ってきます。かぎ括弧に「。」を付けるかどうかというのは非常に違いがありますが、教科書は、普通は「。」を付けてから、かぎ括弧を付けたと思います。私自身は「。」を付けてから、かぎ括弧を置いております。

○関根委員

それがかなり違っていて、特に最近、NIEということで、新聞などでも教育と密接にしています。だから、作文コンクールなどで書かれたものは、必ず教科書に従って「。」を書きます。ところが、新聞や多くの出版物では「。」を取りません。その辺りは、「区切り符号の使い方」に準じています。だから、ほかにも例えば、「！」の使い方とか、あるいは、森山副主査がいろいろおっしゃった記号も、「区切り符号の使い方」に結局遡るものが多いと思います。

あと、前から問題になっている横書き、コンマの問題など、是非、それに手を着きたいと思いますが、どうなのでしょうかとこのところでは。

○田中委員

今、関根委員がおっしゃったことで、新聞などと普通の学校で教えているのと違うのは、「」と『』の使い方が逆ですね。

○関根委員

そうですね。逆です。

○塩田委員

句点とかぎ括弧閉じの問題は、三日前に聞かれました。放送ではどうしたらいいん

ですかと。質問してきた方から、「新聞や雑誌は、普通句点は打たないので、放送でも打たないんですか。」と言われて、すぐ答えられなかったのです。

私自身は使い分けています。ある談話の全体を引っ張ってくる場合は句点を付けますが、政治家の話の一部分とかを引用してくる場合には、これはなしという形で、私は、句点ありなしを使い分けています。

○川瀬委員

局によって違うと思います。テレビ朝日は、全部ないです。

○塩田委員

なし。新聞方式ですね。

○川瀬委員

かぎ括弧の中で二つの文章があるときは、その間には「。」は打ちますが、かぎ括弧の前の「。」はないです。「・」も、どう使うかは決まっています。

○森山副主査

文庫本などを見ましても、本当に使い方は違います。教育的には、一応「。」をしてかぎ括弧を閉じるとなっていますので、社会が変わってきたということがあるのかもしれない。

○川瀬委員

森山副主査は、コミュニケーションの事故を少なくするとおっしゃいましたが、この「事故」という言い方はすごく秀逸だと思いました。コミュニケーションの事故というニュアンスは、ものすごくつかんでいると思います。この記号の使い方を誤ることで、コミュニケーションの事故につながる可能性というのは高いと思われますか。それによって、調査の重要度が変わってくるのかなという気がします。

○森山副主査

正直申しまして、そんなに大きな問題はないかと思います。ただ、先ほどの教科書の例のように、いろいろ使えることになることによって、表現が更に豊かになるということはあるかと思います。それから、多少の事故になったり、ここでこの印を付けておいたら良かったのにとというようなことになったりすることはあると思います。例えば、「行きたいの？」と聞いたつもりなのに、「行きたいの」と言ってしまった。「？」を使った方が良かったといったことがないわけではないと思います。

○塩田委員

私は、事故と聞いて、具体的な例が二つ思い付きました。

一つは、事故を防いだ例ですね。どういうことかと言うと、迷惑メールで、銀行に非常によく似たところからメールが来ました。文頭が「こんにちは！」で始まっているのです。普通の日本人だったら、正式なメールが「こんにちは！」で来るはずはないと思う。これでおかしなメールだとすぐ気が付くわけです。ですが、そんなことを大学で話してみると、日本人なら通じるのですが、留学生は、「えっ、こんにちはに「！」を付けちゃいけないんですか。」と言うのです。日本人だったら、そもそも失礼というか、そういうところで「！」は使わないでしようかと分かっているんです。

あと、田中委員の御専門ですが、「？」は、今のベーシックでは疑問を表わすということですが、音調の上がりを表わすために使っているようです。例えば、「行くよ」と

言うとき、今の学生はメールでは「？」を書くのです。あと、「頑張って勉強した結果がこれだよ」というときに、私は「？」は付けませんが、最近は付けますね。つまり、疑問などではなく、音調が上がっているということ、上がり目ということ「？」で書いているのです。これは、例えば、「行くよ？」とメールで来たら、聞いているのか、今行くという意味の表明なのかが分からないわけです。これはやはり事故ではないかと思えます。

○森山副主査

「行くよ？」ということについて、「「行くよ」と言うのか」といった、そういう解釈もあるかもしれませんね。

○塩田委員

聞き返しとして解釈しますよね、私たちだったら。

○田中委員

資料 22 ページの下の部分について。多分、これはどの試験や調査をやっても関係してくるのではないかと思うところです。「Bさんは運動場で遊んでいるじゃない」について、例えば、首都圏だったら「いるのじゃないか」, 「いるんじゃないか」と入るところが、静岡県とか東海地方の一部には、規則的に抜けるような方言があります。だから、この場合、逆ですが、そういった気付かない方言によるミスコミュニケーションの話もあります。こういった「ん」, 「の」が入る, 入らないといった、日本語研究者であったり、文法研究者であったり、方言研究者であっても、本当に気付かない方言レベルの問題も関わっています。

資料のこの結果は全国の結果でしょうか。

○森山副主査

これは関西です。

○田中委員

関西なのですね。どこの場所の調査なのだろうと思いました。そういった気付かない度の高い方言差に関わる問題もあります。

普通に、先ほどの配列が変わると正解率が変わるみたいな問題は、余り方言は関係ないと思うのですが、こういった連体助詞の「の」が入る, 入らないといったところには、方言差は結構あります。

○森山副主査

意味が変わるのですね。

○田中委員

意味が、えっと思うように変わるところで、同じ表現を使います。だから、こういうのは、全国テストの設問としても危険だし、それを、こういった模範みたいな例で見せるものとしてもちょっと危険だなと思ったので、こういうのはどうしたらいいのだろう。こういうのは出題しないとか、こういうところは、私たちは巧みに回避するとか、そういったようなことはあると思ったので、ここは気になりました。

○森山副主査

ありがとうございます。これ自体は関西で調べていますので、「いるじゃない」と

「いるんじゃない」ははっきり使い分けがあるのですが、逆に、「いるんじゃない」のつもりで「いるじゃない」を使うような方言の皆さんというのは、それがいかに誤解を呼び起こす可能性があるかという、正に方言による事故の可能性について、やはり知っていただく必要というのは大きいですね。

○田中委員

でも、なかなか説明が難しいですね。私、静岡の大学に勤めていたことがあるのですが、職員の方がもう完全に共通語だと思って、この連体助詞の「の」がないものでおっしゃっていました。

○鈴木国語調査官

先ほど関根委員がお尋ねになった 19 ページの文を整理する、「だから」を入れる、誤答例を今ネットで確認しましたので、その御報告を。

誤答例として、一つは、「新しく委員になった五年生は」という、この「新しい委員になった」の前、いきなり冒頭に「だから」というのを付けるというもの。もう一つは、「不安そうにしていた」というところでは切れているのですが、その後、いきなり「教えてあげたいと思った」と、間を全部抜いてしまう形にする。要するに、切るところは間違っていないと言えば、いないのですが、設問の趣旨をきちんと踏まえていないというものでした。

「ぼくは、」から「いろいろなことを」という、ここを丸々落としてしまう、ちょっと書き換え過ぎという、そういうパターンが例として挙がっています。大体 50%以上が、その誤答のようです。

○塩田委員

参考と書いてあるので、私も参考の意見なのですが。私もこれを出されたら、「だから」を使っては書き換えられませんと多分答える方ですね。どういうことかというところ、「だから」というのは、理由を提示して、その順接を出すもので、例えば、「不安そうにしていた。」で、接続詞なしで答えるか、あるいは、「そこで」だったらできますけれども、「だから」というのは理由になって、不安そうにしていることは、教えてあげたいことの理由には私としてはならないので、「だから」とは、私はできないですね。

○森山副主査

そうですね。ありがとうございます。

○塩田委員

無回答か、「そこで」ならできると答えるか。

○森山副主査

なるほど。単純に「……なので」という順接の例なので。

○塩田委員

「なので」なら、答えられます。

○森山副主査

それでの置き換えということですね。

○沖森主査

では、引き続き、質問でも結構なのですが、この御発表をきっかけとして、コミュニケーションの在り方、言葉遣いの問題について、どのような枠組みで考えていくべきか、あるいは、取り上げるべきどのような具体的な問題があるかなど、御意見、御感想等を頂きたいと思っております。どうぞ、お願いいたします。

#### ○山元委員

感想です。結果のゴールとしてどんなものを出すかということに関して、とても示唆的な御発表だと思っております。ありがとうございました。

テンプレートみたいなことに帰着してはという思いをずっと思っていたのですが、それは正しいスタイルのテンプレートではなくて、事故と言いますか、ディスコミュニケーション、間違ってしまったという例を出して、では、こうすればよかったのかなというアドバイスというようなタイプのテンプレートというか、事例集ですか、そういうものの方がとても効果的だなと思わせていただきました。

#### ○関根委員

ユニバーサルに通じる日本語という御提案は、とても良いと思うのですが、どの辺りのレベルに設定するかについて、どのくらいをお考えですか。正に小学校レベルから、あるいは、留学生が間違えるのもありますよね。要するに、平均的な日本人などということと言っても、どの辺が平均的なのが何となく分かりにくい。

今、私は大学で2クラスを教えていて、ほとんど同じくらいだと思うのですが、かなりレベルが違うと思うこともあります。実は、一応試験をして、能力別で分けていて、同じ学校ですから、それほど違うわけではないと思うのですが、かなりレベルが違う。そこでさえ、これだけ違うとなると、果たしてどのあたりにターゲットを絞るかというのを、どのようにお考えですか。

あるいは、日本人全体の国語力みたいなものをまず知る必要はありますね。

#### ○森山副主査

一つの例になるかなとは思いますが。例えば、災害関係の場合には、本当に皆さんに伝えないといけないということが大きいので、最近では、「避難してください」ではなくて、「逃げてください」のようになるように、本当に日本語が不得意な海外から来た皆様というの、ユニバーサルという中では取り上げられるようになってきているかと思うのです。ただ、新聞の内容のような一定の知識という点で言うと、中学校の義務教育を普通に卒業した程度というのが、やはり一つの判断基準になるのかなと、個人的には思っております。ただ、子供たちの中に、最近、発達の背景がいろいろ違う子供たちもいますので、本当にその問題は難しいですね。

ある小学校の先生が、いろいろな書類を、「先生、書いて」と言う親が時々いるとおっしゃっていますが、本当に人によってサポートの仕方というのはまちまちだと思います。切りがないので、中卒程度というのが一つの段階かと思っております。

#### ○関根委員

その中卒程度というのは、新聞もそのようにしているのですが、そもそも中卒程度というものを持っている人が、日本人全体の中でどのくらいかという、そこがよく見えない部分があります。だから、そういう意味で、レベルを中卒程度に合わせるのはいいけれども、果たしてそれでいいのかどうなのか、それで有効な情報として発信できるのかどうかというのが気になります。

#### ○森山副主査

一つは、全国学力・学習状況調査があります。あれは中学校もあります、中学校3年生ですね。ですから、その大体の正答率等で見ますと、かなり難しい文章でもよくできていますので、今、大きく見直しが必要な状況というのはないような気がいたしますが、いかがでしょうか。

#### ○秋山委員

全国学力・学習状況調査は、6年生と中学3年生でやるのですが、4月の終わりに実施するので、中学校の義務教育が終わった段階のというよりは、中3になったときの、だから、14歳の中2までの学力がどう付いているかというものです。あのデータを見てみると、日本の子供たちの学力は落ちているとも言えない。全体的には上がっているわけです。

ただ、今、関根委員がおっしゃったように、私も大学で教えていて、私はさっきの「？」のところは、日本語には助詞があって、「……ですか」というのは疑問を表わす助詞を使っているのだから、そこに「？」は付けないと中学校でも教えていましたし、学生にも、「これは付けない方がいいんじゃない」という話をしていました。公のときはそうなのだろうと思うのですが、中学校の教科書を全部見てみると、表記の部分も押さえてはあと思うのです。「・」と、読点・句点の違いもちゃんと押さえてあるし、結構教科書はよくできていると思うのですが、それをどこまで日本の子供たちが習得して、大人になっているかということはありません。

やはりそこですごく思うのは、中学校の義務教育まできちっと教えていくというのが、文部科学省も言っているように、また、学習指導要領も変わりますが、そこをどうやってきちっと教えて、高校に持っていくか、上に上げていくかというところの押さえがまだまだ足りないのでしょうか。15歳の姿にどう責任を持っているかというところだと思います。

#### ○山元委員

ターゲットを考えたときに、国語の学力で言うと、義務教育というのでいいのですけれども、コミュニケーションの問題ということになると、もっと世代が違うような人たちの間でのコミュニケーションの事故というか、ディスコミュニケーションというの視野に入れるとしたら、例えば、二十歳で、社会で何か責任を持っている人たち、それはただの例ですが、もう少しターゲットのイメージが変わるかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

#### ○森山副主査

言い出すと、それこそ70歳、80歳、いろいろな方がいらっしゃいまして、一応教育を普通に受けて社会で活躍している皆様ということで、細かいことを言い出すと、本当に切りがないような気はします。

ただ、先ほど秋山委員から紹介していただいたみたいに、日本の国語教育というのは、結構世界的にもレベルが高くて、一時期、PISAショックがありました。今やもう世界でトップ級にまた返り咲いています。そんなテストがどうなんやという話がありますけど、特に大きな重大な変更というのとはなくて、普通に我々が常識的にこうなのだろうと思う範囲というの結構いいのかなと思います。

#### ○川瀬委員

言葉のユニバーサルデザインという言葉がとてもすてきなもので、やはりそこに意識を引っ張られてしまうのですが、もしかしたら、森山副主査の御発表をずっと伺ってきたところでは、もっと大きく大事なものは、みんなが伝え合いに対して意識的になる、



これが結論なのかと。

そうすると、ターゲット論ではなくて、伝える人、受ける人、また、それを聞いて次に伝える人、その関係性に対して意識的になろうという、そういうマインドを作ることがユニバーサルデザインなのかなと思います。言葉そのものをどう規定するというのではなくて。だから、感覚的な共通項みたいなものを、コミュニケーションで事故を起こさないための気持ちとして、何を持ってくるのか。

それから、誰を対象にというのは、やはり考え出すと切りがなさそうです。誰とでも、どんな人とでも、その代わり、誰に対してでも、どんな人に対してでも意識的になろうということ強く打ち出すことが大事なのかなと思いました。

#### ○田中委員

今おっしゃったことはすごく大事だと思うのですが、例えば、ノンネイティブの人たち、あるいは、日本語学習歴の浅い人たちで日本語社会に暮らしている人たちに対する言葉としては、「やさしい日本語」といったような試みがあります。そこはそれとして、ネイティブベースで一定のリテラシーを持ってコミュニケーションを取っていくといったところを主眼としてお考えになっていると理解してよろしいでしょうか。

#### ○森山副主査

はい。基本は、ネイティブの大多数の日本国民というつもりです。ただ、ノンネイティブの方も聞かれる場合があるので、そういう人にも分かりやすくという配慮がみんなできるようになったら、優しい世界ができると思いました。

#### ○塩田委員

例えば、句読点のことで、公的な文書についてはこうだと定めた場合に、何がしかの影響は、国語教育には当然入ってきます。あとは、日本語教育にも多分関わってくると思います。日本語教育で今「？」や「！」をどうやって扱っているか分からないのですが、実態としてはいろいろなことを表せる。例えば、句点だったら、「100点取ったの」という同調する形ですね。「？」だったら、「100点取ったの？」という疑問。「！」だったら、子供が、「見て見て、100点取ったの！」。「！？」だったら、「100点取ったの！？」とお母さんが驚くような。だから、4種類を表わせるのが、今の教科書では一つしかできないわけですね。

では、それを定めたら、それを国語教育や日本語教育で教えるのかどうかという問題がやはり出てきます。非常に複雑な文末イントネーションのことを日本中に広めることになると思います。

#### ○田中委員

今、塩田委員が言ったことで、「あ、そうだ」と思ったのですが、何となく表記ベースに向かっているような気がするのです。今、音調の話が出たので、表記ベースだけに収められるわけではなく、今はたまたま表記ベースの話が主となったという理解でよろしいでしょうか。

#### ○森山副主査

実は、どちらかという、表記ベースの方が、我々の議論としてはやりやすいのかなという思いはあります。一番私がショックだったのが、小学校の教科書で「？」が使えないという、そういったところとか、それから、さっきおっしゃってくださいましたが、かぎ括弧の使い方が、社会と、あるいは、人によっても非常にバリエーションがきているとか、それから、「（てん）」と「・」などが、検索を掛ける場合でも、混

乱しているところがありますので、そういったところの整理もできるかと。飽くまで表記が一番やりやすいかなとは思っております。

○田中委員

はい。賛成です。というのは、音調は何が標準的なものかというのは、もっと地域バリエーションとか属性によるバリエーションがあり過ぎるので、やはり表記ベースの方が圧倒的にやりやすいし、普及の効果もあるように思います。

○入部委員

この33ページなのですが、こちらは御説明がなかったかと思うのです。これは、私などは、これを見ると非常に不快感を持つというのですか、こういう使い方は悪い例ですからと、もう最初から言ってしまうことになるのですが、恐らく「藤岡弘、」には藤岡さんのいろいろな理由があって、私もそれを調べて、結果的には誰よりも詳しくするのですが。この部分、御説明を是非お願いします。

○森山副主査

いや、もう本当におっしゃっていただいたとおりで、私、初めて見たときに、こんな句読点は、文ではないのに間違っていると思ったのですが、結構、自由は自由ですね。いろいろあっていいけれども、一般的な使用と一般的スタンダードということの区別というのでしょうか、二層というのが、先ほどの漫画もそうですが、本当に創意工夫して、もうめちゃくちゃと言ったらおかしいですが、場合によっては、それは一つの文化なのかもしれません。あえて規制はせず、でも、私もちょっと嫌だなと思いました。

○入部委員

森山副主査が肯定されるなら、ちょっと考え直そうかなと思ったのですが…。

○川瀬委員

これは、でも、嫌だなと思うのを逆手にとって「、」を付けたのですよね。

○森山副主査

きっと、そうでしょう。

○秋山委員

そういうことで付けて、はまってしまった。

○塩田委員

「藤岡弘、」は、いつまでたっても自分のレベルは未完であるという、そういう意図を持って、わざとこうやってしている。

○川瀬委員

では、「…」でもよかったのかもしれない。  
あと、登録商標で同じのがあると、「。」を付けておこうというもの。

○塩田委員

TBSの「人間・失格」がそうでした。ドラマで「人間失格」をそのままやろうとしたら、太宰治のになってしまうので、「人間・失格」という形のドラマにしてやった。

○田中委員

「君の名は。」だってそうではないですか。

○川瀬委員

「君の名は。」までになってくると、商標としてどこまで認められるかというのは、タイトルはなかなか難しいところなのです。

単純に記号という意味はないものが表記の中にはいっぱい出てきているというのが、時代性かという感じもします。そこまでもコミュニケーションの範囲として考えるか否かというのは、本流としては難しいのかという感じもしますが、でも、大事な部分だと思います。確かに、わくわくする思いはあります。

○関根委員

でも、やはり森山副主査がおっしゃるように、句読法、記号類の使い方の標準というのが確立されていないからこそ、こういう多様な使い方が簡単に出てくるのではないかなと思います。使うのは構わないけれども、いわゆるスタンダードというのがしっかりしていれば、そうむちゃくちゃは出てこないような気がします。あるいは、それを知った上で使うというのはあるかもしれないですけど。やはりこれはこれとして、スタンダードは欲しいと思います。

それは、前回私が発表した異表記の問題と同じように、直接事故にはつながらないかもしれないけれども、やはり情報処理容量を無用に消費してしまう部分だと思います。だから、是非これはやりたいと私は思います。

○森山副主査

表記に関しまして、私、昔、助手をしていたときに、法務省から電話が掛かってきまして、「フィ」という音を日本語の音として、外来音ですが、それを平仮名で書いて、お名前として登録しようとした方があったそうです。「ふいあら」ちゃんか、「そふいあ」ちゃんか。そのときに、「フィ」というのは一般の仮名遣いの中にはないので、認められない。しかも、外来語だったら片仮名でいいのですが、日本人のお名前だから平仮名で書きたい。小さい「い」というのは認められるのでしょうかと聞かれたことがありました。調べましたけれども、特に規定はないのですね。それで、「では、その方向で」とおっしゃっていたので、世の中に「ふい」の方がどこかにいらっしゃるのかなと思って楽しみにしているのですが。例えば、「藤岡弘、」さんとか、「藤岡弘。」さんとか、あるいは、「藤岡弘！」さんといった方は、法務局で、例えば、お名前を住民票で登録するときは、あれは認められないですね。

○田中委員

どうなのでしょう。認められないのですか。

○武田国語調査官

認められないです。

○森山副主査

ですよ。表記記号ですからね。

○田中委員

記号は駄目なのか。

○武田国語調査官

はい。長音記号は大丈夫ですが。

○森山副主査

長音記号は。例えば、森山卓郎の「う」の後に小さい「ょ」を、「森山卓郎ょ」みたいに書くような、実質、日本語の表記ではないのだけれども、これは私の名前としてユニークで出したいというようなことがあったときに、それは多分却下しにくいかと思うのです。その辺りも、非常に変な話ですが、お名前で認めるという表記は、結局、それは公の表記になりますから、仮にその方が国会議員になられたら、それは正式なものとして皆さんが共有しないといけないわけですし、結構表記の問題の整理というのには、まだまだ盲点と言ったらいいのでしょうか、ちょっとグレーな部分というのもしろいろあるのだなと思った次第です。

○塩田委員

戸籍上は当然駄目ですよ。句点とか読点が入っているのは駄目ですよ。

○武田国語調査官

はい。使えないです。

○沖森主査

今、「う」の次に「ょ」という、そういう音はないですが、認められるのですか。

○武田国語調査官

戸籍法の施行規則では、片仮名又は平仮名（変体仮名を除く）というのと、漢字はあるのですが、漢字のほかには、片仮名又は平仮名ということになっているのですね。

外国の方などの名前を登録するときには、長音記号が入ってくることがありますが、日本人の普通の日本名を登録するときには、常用漢字表の漢字と、人名用漢字の中に定められている漢字と、それから、片仮名又は平仮名（変体仮名を除く）というのが規定になっています。

○森山副主査

そうしてみると、先ほどの「う」の次に「ょ」はオーケーですよ。

○武田国語調査官

そこは、軽々なことは言えないのですが、平仮名・片仮名というのに入ってきますので、あり得るのかもしれませんが、そこは今度確かめてお知らせしたいと思います。

○塩田委員

長音は大丈夫なのですかね。

○武田国語調査官

長音記号は、外国の方などのお名前には当然入ってきます。

○塩田委員

では、「たろー」という形の命名は可能なのですかね。

○武田国語調査官

多分，日本人だと，それは難しいと思います。

○沖森主査

仮名遣いの規則というのも当然関係するので。

○武田国語調査官

その辺りも，きちんと確かめて，また。

○沖森主査

ただ単に記号だけというわけにはいかないでしょうね。

○塩田委員

アルファベットやギリシャ文字は駄目だというのは聞いたことがあります，時々それをやろうとする人がいて。

○沖森主査

そろそろよろしいでしょうか。今回，いろいろ話題が豊富でしたが，何かまた後でお気付きの点，言い足りない点がありましたら，事務局までメールもしくはFAX等でお伝えいただければと思います。森山副主査には，本日の御発表，誠にありがとうございました。

本日までに8人の委員の方に御意見，あるいは，御見解を発表していただきましたけれども，いよいよ議論の焦点を絞る時期に来ていると考えております。今後，具体的な成果物を作成していくに当たっては，毎回の国語課題小委員会で検討していただくためのたたき台となるようなものをお示しする必要があるのではないかと思います。つきましては，この国語課題小委員会に諮る原案を作成するための作業部会を発足させたいと考えております。できれば，年内にも発足したいと思っておりますけれども，本日の段階では，このような予告ということにして，詳しい御提案は，次回の小委員会で改めてお話し，お諮り申し上げたいと思っております。

以上で，本日の審議は終わりいたします。最後になりますけれども，本日御発表くださった森山副主査に，改めて御礼申し上げます。

では，以上で，本日の国語課題小委員会を終了いたします。御出席くださり，ありがとうございました。